ともしび

祖母の仏縁に照らされて

井上直之（釋直道）

十月に入り、寝苦しかった暑さも和らぎ、この原稿を書いている今、鈴虫の鳴き声が心地よく聞こえています。

九月十八日には、今年から仏教壮年会の会長になられた福島慶久さんと坊守と私、三人で千鳥ヶ淵戦没者追悼法要へお参りに行かせていただきました。

この法要は、悲惨な戦争を再び繰り返してはならないという、平和への決意を確認するために、私たちの宗門の主催で毎年修行されています。

残念ながら、今でも世界中で殺し合いは止むことなく、私たちの身近な所でも殺人事件が起きる世の中です。

「欲」「怒り」「愚痴」という煩悩を持った私たち人間。最近の研究で、人間は一万年も前から殺し合いをしてきたことが判明したそうです。

あるお寺の封筒に書かれていた言葉です。

そんかとくか
人間のものさし
うそかまことか
仏さまのものさし

私たちは今一度、仏さまの教えに耳を傾けなければならないのだと、強く願うばかりです。

昨年の十一月に祖母が亡くなり、早いものでもうすぐ一周忌を迎えようとしています。

気づくと子どもたちは二人揃って仏さまに合掌できるようになりました。一緒にいるのが当たり前だと思っていた祖母との別れ。今さらになって祖母と一緒に暮らした日々は当たり前じゃなかったのだと気づかされています。

今年の春、私は御本山西本願寺の御影堂で行われた音楽法要の導師をしました。人生初めての御本山での導師でした。

しかしこの日、長女に風邪をもらってしまった私は、咳は出るし喉は腫れて声はガラガラ。このような大きな法要でミスをせずにきちんと歌えるかどうか不安でした。

そして本番になり、不安な気持ちのまま中央に立ったときです。開始前、物音ひとつしない静かな時間。そのとき、一瞬祖母が浮かんだのです。私は「ばあば見守って」と心の中で言いました。

亡くなっても、祖母は私を勇気づけてくれました。人の死は、決してさよならだけではない、という仏さまの教えを祖母は伝えてくれました。

報恩講では、浄土真宗のみ教えを明らかにしてくださった親鸞聖人のご恩を偲び、阿弥陀さまに手を掌わせ、皆さまとともに仏縁を深く味合わせていただきたいと思います。

合掌

一周忌法要のご案内

前住職の一周忌法要のご案内です。出席を希望される方はお寺までご連絡ください。

法要と納骨、その後お斎となります。秋の一日、長い間宗願寺を守ってくださった妙澄師を偲び、静かに過ごしたいと思います。

準備の関係上、申し込みは、十月末日締め切りとさせていただきます。

秋嶺院釋妙澄一周忌法要

11月8日（金）午前11時
（受付　10時半）

秋に憶う

井上　由真

秋の空を眺めながら、実った柿を見つけて、青空と柿の実、そして紅葉した葉が美しいと飽きることなく眺めていた母を思い出します。もうじき一周忌を迎えます。

七月に千葉県を訪れ、母の名前「澄子」の元となった清澄山へ行くことができました。父親の仕事の関係で、裁判所の近くを転々とした家族、母は千葉県で生まれたのでした。日蓮上人のお山は緑が濃く、若かった頃の祖母のことや子どもの頃の母のことを想像し、胸がいっぱいになりました。

銀杏が落ち始めました。ゴム手袋をして働いています。今年も報恩講のお斎のがんもどきに入れることができます。

お寺の報恩講は、以前は十一月二十三日でした。十月の第四日曜日になったのは、祝日はイベントが多く、ご門徒さんが町会の役をされていたりしてお寺に来られない方が多かったからです。

調理はほとんど私がしますが、野菜の下ごしらえや配膳は仏婦の仕事となっています。年々働ける方が減って、心配しています。

母は音楽が好きでした。宗願寺に合唱団ができたことは、母の夢の実現です。母はお寺に音楽を、と活動してきたので、それができる孫が住職になって思いを継承できることを有難く思います。

膝が悪くなって、思い切り働けないことを情けなく思います。早く動くことや重いものを持つことができなくなりました。以前は普通に運んでいた三十キロのお米が持てません。

膝の痛みも「授かりもの」として喜べる私だと良いのですが、まだ若いつもりなのか、頑張りたいのです。すべてを尊いご縁として味わって……と自分に言い聞かせています。

呼び声が力なりけり旅の空
風吹かば吹け　雨降らば降れ

※呼び声とは南無阿弥陀仏

お知らせ

成道会
12月8日（日）
法要　午前11時半
バザー　正午
コンサート　午後1時半

修正会
1月1日（水）　午前10時

御正忌報恩講
門信徒会新年会
1月13日（月）　午前11時

立春拝賀式・仏婦新年会
2月4日（火）　午前11時

追悼
秋嶺院釋妙澄

前住職の往生から一年、寺報「ともしび」に残された言葉を、そのまま読んでいただきたいと思い編集しました。

私の得度

私の得度につきまして、たくさんの方から激励をいただき有難うございました。

私が御真影さまと同じ屋根の下に暮らさせていただくようになってから十五年になります。その間は、在家の主婦達と同じ、子どもを育てることに夢中で過ごしてきました。

二年前に先住が亡くなり、初めて自分の立場の重さに気がつきました。今の私にとってまず大切なことは、住職を助け寺務にあたる際に父の意思を相続することであると考えたのです。

そして、父が生前すすめていた築地本願寺の仏教学院へ通いました。教科書もノートも鉛筆入れまで父は用意しておいたのです。私の一年間の夜学通いのため、老坊守の母は三人の孫を守り、働き通しました。そして、父の三年忌法要を勤めると同時に、得度を受けることができたのです。

これで私も自信を持って住職を助け、皆さまの聞法のお手伝いをすることができます。

これからは、皆さま方とますます仲良く、皆さまの憩いの場として宗願寺を守り育てたいと存じます。

（昭和四十二年二月四日号）

遺影

菊とオリンピック

御堂に菊の花をどっさりと活けて、その香りを指先に残したまま、私はテレビのオリンピック中継に見とれていました。秋日和が縁側から床の間までさし込む朝、メキシコの興奮がそのまま私を包んでいる。思えば東京オリンピックのとき、先住はひん死の床にあった。

その日、丁度同じような秋の日和を背にうけて、市内の壇家の葬儀に出かけた父は、夕刻同家の埋葬式の最中、静かな微笑みのまま内陣で倒れた。それから九日間、何も語らず、何も求めず、静かに横たわって時の流れに身を任せていた。特に小菊を好んだ父は、菊に囲まれて今生に別れを告げた。

東京オリンピックに沸き返っていたであろう港の賑々しさとは対照的な菊いっぱいの宗願寺は、静寂そのものであったろう。

菊とオリンピック、不思議なとり合わせで父を思い出すこの頃である。

（昭和四十三年十一月三日号）

お寺から　門信徒の皆さんへ

行事が多くて忙しい一年でした。恵信尼さまに明け暮れした婦人会、先住の七回忌法要をつとめ大谷本願寺へ団体参拝した門信徒会。大阪津村別院の全国仏青大会へ遠征した青年会。歎異抄に取り組む遊林会。それぞれの会が軌道に乗った活動を続けてきました。

行事が多いということは、聞法の機会が多いということで、それだけ法縁を得ていることになります。お寺参りにみえる方の何気ない会話の中から、その人なりの生活の変化や成長ぶりをうかがうことができて、内心嬉しく思うことが多くなりました。

聞法とは、正しい教えを身体で聞き、心に貯えて、何気なく過ごしてきた生活がよりよく生きようと、精進の生活に変えられていくものようです。不思議としか言いようのない力を、自ずとそなえていきます。そして、私自身の努力だけではない大きな力に支えられてきたことに気がつくのです。私が法を聞こうとする以前に、聞けよ聞けよと呼ばれていたのではないかと、知らされるのです。

お寺からの案内状は、仏さまからのお招きと思っていただきたいのです。この頃住職はこんなことを申します。「住職は天職である。会社務めは職業だ。職業は自分の都合で選ぶことができるが、天職はそうはゆかぬ。天職とは、生まれながらに仏さまの勅命を受けてきたことだから、生涯をかけてお報いせねばならない。辛いことにゆきあたると恩徳讃を口づさむことにしている。」と……。

住職のこのような決意は私にとっても同じことが言えるので、坊守として寺に縁があったものはやはり仏さまの御意に添うよう精進せねばなりません。そしてこの聞法を盛り立てて、私自身もすすんで聴聞し、法に浴さなければなりません。

お寺には、世間に見られるような公害も、喧嘩もありません。大らかな法の恵みと、飽きることのない自然のなかで、心ゆくまで善き師、善き友と真実の教えを語り合い、道を求め合うところです。

善き師、すなわち親鸞聖人を仰ぎ、お互いはひとつの信心に結ばれた仲間です。何の遠慮も体裁も要りません。ありのままで素直な心で語り合いましょう。音痴もどら声も一緒に歌った「恩徳讃」、嬉しくておかしくて思わず微笑みを交わすあの和やかさ……。

苦しみも悲しみもすべて、南無阿弥陀仏とお称えするとき、消えていることに気がつくことでしょう。

お寺は永遠の幸福と安らぎに満ちている聖地であります。忙しいからこそお詣りせねばなりません。そして、本当の幸せにめぐり合うために、法座にはすすんで参加していただきたいものと、いつでもお寺は待っています。

（昭和四十六年三月三十一日号）

得度の頃
昭和41年1月30日

引退にあたりご挨拶

十年越しの後継者育成に、門信徒の皆さまのご支援をいただき、この度、若い住職が誕生いたしました。

前住弘三法師の意思を継いで、宗願寺第二十五世を継承した直道師は、西念坊の一門井上氏に入籍、日々精進、ここに骨を埋める覚悟をいたしました。

門信徒一同の念願でもあり、寺族の責任も果たすことができまして、本当に嬉しく思っております。心から、門信徒の皆さまに感謝申しあげます。

これも、護持講の結成と推進にご尽力いただき、実践してくださった総代世話人を支援、協力していただいた門信徒一同の成果であります。「愛山護法」の思いから、仏祖の加護と宗願寺の興隆を念じてやまない祖先のお陰でもあります。

今後とも、若い住職をご支援いただきますよう、私も命ある限りバックアップをしてゆきたく、心を決めております。

直道へ

春一番　吹き荒れる空　梅が枝は
真直ぐのびて　白き香放つ

（平成二十年三月九日号）

七百回大遠忌当時の思い出

宗祖の七百五十回大遠忌が来年に迫り、緊張感とともに五十年前の大遠忌前後のことを思い出しております。五十年前と言えば、父も母も元気でしたし、娘たちはまだ幼く、私の母がいつも手伝いに来ておりました。

昭和三十六年から、大遠忌を迎えるために、本山や別院から浄財を募る役職の方々が度々来寺され、父と母が丁寧に面談していたことが思い出されます。そして、世話人会が何度も開かれ、狭い本堂の座敷が世話人方でいっぱいだったこと、散会の前に八百角の温かい蕎麦をお出ししたこと、父の時代はお酒をふるまうことはなかったようです。

ちょうどその頃、猫がネズミを追いかけて天井が抜けてしまい、多量の泥が座敷に積もるということがありました。それを機に、本堂再建の話が出てきたのです。

七百回大遠忌の記念事業にもなるという意気込みで、全門信徒に協力を呼びかけ、百戸足らずのご門徒が一丸となって、浄財五百万円を集めてくださいました。

事業の中心となって働いてくださった、北野信次郎氏と飯田長左ェ門氏、お二人は寺の普請のためにと木を育てている家へ出かけてくださいました。

小山市の酒井家からはミズの木、上大野の飯田家サワラの木、同じく上大野の金澤家からは黒柿とモミジの木、いずれも古い木々でした。

材木の前後に真紅の布を結び、お寺まで4トントラックで運びました。一度道路に降ろし、三十人程の男衆が丸太にロープをかけ、天秤棒をさして掛け声とともに境内まで運びました。

父と母は物置へ引っ越し、私達は駅東の私の母の家へ移りました。そして、由美子と典子は第一小学校へ通い、小さな弘子は母に預けて、私は職人と両親の世話にお寺へ通いました。

昭和三十八年四月一日、落慶法要を勤め、その一年後、父琢為法師は十月二十一日に八十五歳で往生されました。

御本山での七百回大遠忌法要に参加する団体は茨城西組は栃木南組に合流して、小山駅から上山したのです。

その時の組長さんは下館・光徳寺の相馬順証師でした。白いお鬚の先生は、竹の杖をついて事内を歩き、笑顔でご門徒さんたちを見回ってくださいました。後に、相馬先生をお寺にお招きして、「出家とその弟子」の朗読をいただき、昔、徳川夢声と一緒に活動した、と若い頃のお話を伺いました。

宗願寺の門信徒会は昭和四十二年正月に結成、翌四十三年二月に仏教婦人会、同年八月仏教青年会が発足いたしました。

そして、十一月二十三日には、当山の大遠忌法要が厳修されました。狭い境内に、稚児行列を先頭に役員一同が続きました。賑わいの中で仏旗を掲げていたのは、初代仏青会長・野口時雄君でした。

現在、当時の仏青OBは仏壮と合流、弘三法師の愛弟子、の思いを胸に、世話人の役を果たしております。

（平成二十二年十月二十四日号）

今億うこと

孫・朗子誕生の頃
平成２年１月26日

あの恐ろしい地震と津波に襲われて一年経ちました。人間の無力さをしみじみ感じて、涙も出ずに唯々思わず大いなる力に手を合わせるだけでした。

そんな中でも、東北に桜が次々と咲いて、どんなにか悲しい思いを慰められたことでしょう。

人間の無力さと、自然の威力をあらためて知らされたことでした。

私たちの先輩は、天災に幾度も遭いながら、大切なみ教えを心のよりどころとして、生き抜いたのです。

「十方衆生よ（生きとし生きるすべてのいのちよ）我を信じ我が名を呼ぶ者は（南無阿弥陀仏）摂取不捨（必ず必ず救わずにはおきません）」

私たちはこのみ教えによって、たくましく生きてゆくのです。

いつ、どこで、どのような生命の危機にさらされようと、究極の救済を約束してくださった阿弥陀さまに抱かれて彼の国へ往くのです。

心暗くするばかりの情報やテレビに惑わされることなく、静かに手を合わせ、念仏を称えてまいりましょう。

（平成二十四年三月十一日号）

宗願寺の阿弥陀如来像について

幾度もの地震が続く昨今、お寺のご本尊の阿弥陀如来さまは大丈夫かしら、とご心配の方もいらっしゃると思いますが、お陰さまで無事に難を逃れて、金箔で輝くお宮殿の中にしっかりと立っておられます。

この阿弥陀さまは、いつでもどこへでも飛んで行けるようにお立ちになっておられるのです。

ここ宗願寺が、門跡兼帯所に指定されたとき、御本山からお預かりしたのもであり、恵信僧都の作と伝えられています。

明治の新政府が、神道による新しい国造りを推進するため、廃仏毀釈令を発布しました。それを受けて、暴徒が寺院に火を放ったり、宝物を壊したり、大暴れしました。本願寺の名僧島地黙雷師らが政府に撤回を直訴したため、五年後にはこの政令は禁止となりました。

その間、宗願寺の阿弥陀さまは一時ご本山にお返しするために、門徒が背負って上山したと伝えられています。

その役の、中心となった方は、戸井田家の先祖でした。天下の鎮まるのを待って再び上山、大切に背負われて帰って来られた阿弥陀さまは、御堂の真ん中に迎えられ、今日まで皆さまをお護りくださっています。

額には水晶の玉が光り髪の中には赤い瑪瑙が輝いています。白い光は仏の智慧をあらわし、赤い光は仏の慈悲を表わしています。

片手を挙げて、私を「おーい」と呼び、もう一方の手は「必ずお前を救う」とのお誓い、そういうお姿であります。

御本山から再びお預かりするとき、「粗相のないように」とのお言葉が添えられていました。

このお寺でいちばん大切なのはこの阿弥陀さまです。お姿こそ真っ黒ですが、ご門徒の皆さまとともに、大切に護ってゆきたいと思います。

（平成二十四年十月二十八日号）

療養中、人前で仏教讃歌を歌う最後の姿
平成27年８月４日

念仏申す日々

どこからかミカンの香りが漂ってくる季節となりました。

長いこと療養生活続け、皆さまに御心配をおかけしましたが、ようやく、時々は外に出て、お使いができるようになりました。

次々と友人が亡くなり、私も九十歳まであと少しの老齢となり、敬老を務める側から敬老を受ける側となりました。

このいのちを、大切に大切に生きて、このいのちあることの有難さに念仏申すことが日々の営みなのだと、しみじみ思うこの頃です。

我を信じ（我とは阿弥陀さま）我の名を呼ぶ者は摂取不捨（必ず助けずにはおれません）。南無阿弥陀仏、繰り返し、南無阿弥陀仏。

合掌

（平成二十七年十月二十五日号）

本願寺音御堂（おとみどう）に参加して

刈部　俊一（釋光俊）

四月三十日、宗願寺合唱団の仲間三人（ソプラノの斎藤さんと竹内さん、テノールの大桑さん）と本願寺音御堂に参加させていただきました。

本願寺音御堂は、日頃より仏教讃歌に親しむ門信徒の方々が、本山に集い行われる合唱大会です。

全国の各団体が、日々の練習の成果を発揮する機会でもあるとともに、御堂において、ご本尊である阿弥陀さまに向かって合唱をする仏徳讃嘆の催しとなっています。

平成五年より「御堂演奏会」の名で親しまれてきましたが、平成二十九年、第二十五代専如ご門主へのお代替りを機に「本願寺音御堂」と改称されました。

「音御堂」とは、仏徳を讃嘆する歌声がお堂全体に響き渡り、満ち満ちるさまを表わしています。その名の通り、仏教讃歌を通して、おみのりを喜ぶ方々の歌声、仏さまをお讃えする思いが一つになる合唱大会です。

今回は、全国から約三百名の讃歌衆を得ての音御堂となりました。

午前中、門徒会館にて本番に向けて直道師と相愛大学音楽学部で合唱の指導をされている田末勝志師の最終練習が行われました。

田末師は関西のご出身らしく、コテコテの大阪弁で直道師との対比もおもしろく、それぞれのアプローチでご指導いただき、限られた時間でしたが着実に曲が仕上がっていきました。讃歌衆もよく指揮についていって、豊かなハーモニーが練習会場に満ちていきました。

昼食は、京都の彩豊かなお弁当をいただき、お腹も満足。いよいよ本番です。阿弥陀堂が改修中とのことで、音御堂は平成二十六年に国宝に指定された御影堂で執り行われました。

本番直前に三帰依のリズムや発音の訂正が支持されるなどのハプニングがありましたが、音楽礼拝は直道師のリードで厳かに執り行われました。

西本願寺で指揮をする住職

続く合唱曲は、中田喜直作曲の「ありがとう」、平田聖子作曲の「本願力のめぐみゆえ」等四曲を直道師の指揮で、組曲「浄土讃」は、田末師の指揮、作曲された藤林由里さんのオルガン伴奏で演奏いたしました。

本願寺音御堂は、全国各地のご門徒を中心に讃歌衆が組織され、参加者それぞれの仏さまへの思いが音楽表現につながり、通常の合唱より心のこもった充実した演奏になったように感じます。

本願寺音御堂では、阿弥陀さまに向かって合唱するという大変貴重で得難い体験をさせていただきました。今後も機会があれば、ぜひ参加したいと思います。

彩弥（さや）と弥那（みな）との日々

井上明寿子

温泉にて
弥那（前）彩那（後）

彩弥は四歳、弥那は二歳を過ぎて、貸し借りや半分こができるようになりました。行動範囲も広がり、今年の四月には住職が導師を勤める西本願寺の音御堂をお参りしてきました。

初めての新幹線にふたりとも興味津々です。周りに迷惑をかけないか緊張する私をよそに、娘たちと話をしてくれる方がたくさんおり、英語で「ベビーカーを運ぶよ」と声をかけてくれた方もいて、それがとても自然で有難く、あっという間の二時間でした。

音速の「こだま」光速の「ひかり」、希望の「のぞみ」の愛称で呼ばれる東海道新幹線ですが、今後の新しい車両には是非、人間の尺度を越えた「たりき」の名をつけて欲しいと思います。

音御堂も素晴らしかったです。約三百名が阿弥陀さまに向かって歌う姿は、それぞれの思いが真直ぐに届くような、ご縁が響き合うような、音御堂という名にふさわしい演奏でした。

九月には千鳥ヶ淵の戦没者追悼法要に参列し、世代間の継承ではなく、今私たちに問われていることは何か、自分と向き合う機会をいただきました。

子どもたちはお留守番だったので、帰ってから大騒ぎで、それどころではなくなってしまいましたが……。もう少し大きくなったら連れていきたいと思っています。

子どもたちと向き合う中で、み教えに気づかされる日々です。

バザーご協力お願い

仏婦では、成道会バザーのための日用品等を集めています。ご協力いただける場合は、十一月末日までに、集会所へお届けください。

仏教壮年会
第2土曜日　午後6時

仏教婦人会
16日　午後1時

編物教室
第2・第4火曜日　午前10時

宗願寺合唱団の練習
第3日曜日　午後1時半

編集後記

今回の「ともしび」では母の特集をしてみました。父が亡くなった時には、プロの方にお願いして立派な追悼集を作ることができました。今回は、書く人も読む人も少なく、本を出すことは諦めました。

父は七十二歳で亡くなったため、友人知人が多く残され、彼等の声を集めることができました。母の場合は八十九歳、ともに生きた方々の多くは亡くなったり、病の床にあったり、その死をお知らせするのにも躊躇したのでした。

お寺で母がしてきたことはちゃんとしなければ、との思いで、住職・坊守と一緒に頑張った一年間でした。母との別れは悲しくても、彩弥と弥那の可愛らしさがそれを忘れさせてくれる、そんな時間を過ごせる幸福を味わっています。

ほとんどの時間をお寺で過ごし、ご門徒さんたちとお会いしています。ここ宗願寺でも、後継者がいないことで「墓じまい」をされた方があります。テレビの中だけの話ではありませんでした。無理をせず、できることをさせていただくと心に念じつつ、難しい時代を生きています。

合掌

発行・宗願寺門信徒会
編集責任者・井上由真（由美子）
カット・大建弘子
（印刷所・阿部印刷）